

滋賀県発！ 持続可能社会への挑戦

科学と政策をつなぐ

内藤 正明 (滋賀県琵琶湖環境科学研究センター長、京都大学名誉教授、工学博士)

嘉田由紀子 (前滋賀県知事、元日本環境社会学会会長、元琵琶湖博物館総括学芸員、農学博士)

[編]

「琵琶湖が死の湖に！」

それは1977年、大型赤潮発生から始まった。

原因究明から対策立案、そして住民を巻き込んだ「せっけん運動」から「富栄養化防止条例」制定へ。

こうした科学と政策の連携プレーで次々と先進的環境政策を推進した滋賀県。

その理念と歴史を紐解き原動力に迫る。

最新の「滋賀モデル」の構築と、原発事故を想定した放射性物質拡散シミュレーションもくわしく紹介。

A5判・242頁 定価 3240円 ISBN978-4-8122-1717-7

[目次]

第I部 琵琶湖の環境保全をめざして——科学と政策と文化の融合

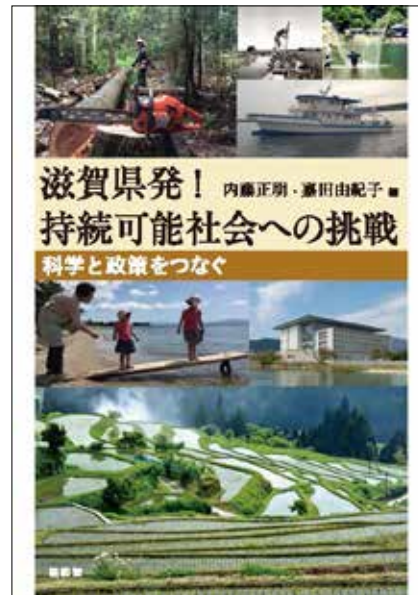
- 第1章 琵琶湖とは何か——生物進化と湖沼文化の独自性
- 第2章 琵琶湖政策の歴史——近代化における縦割り行政の拡大
- 第3章 琵琶湖の科学研究の発展——総合化への100年
- 第4章 これからの新たな琵琶湖政策——生存可能社会を求めて

第II部 真の持続可能社会をめざす「滋賀モデル」

- 第1章 地域からつくる持続可能社会
- 第2章 持続可能な地域社会の実現シナリオ
- 第3章 持続可能な地域の将来社会像
- 第4章 ビジョンを実現するためのロードマップ
- 第5章 ビジョンの社会実装に向けて

第III部 原発事故による放射性物質拡散予測への挑戦

- 第1章 なぜ「卒原発」を滋賀県から提唱したのか——「被害地元」知事の責任と苦悩
- 第2章 放射性物質は滋賀の大気でどのように広がるか
- 第3章 放射性物質は琵琶湖でどのように広がるか
- 第4章 [座談会] 滋賀県・琵琶湖の放射能予測が私たちに問いかけたこと



歴代知事、武村正義氏、國松善次氏 推薦！

「あの赤潮発生以来、こうした専門書が世に出ることを心から願っていました」

長いあいだ、待ち望んでいた書物が出ました。内藤さんと嘉田さん。二人の専門家が、びわ湖とびわ湖政策を、体系的総合的にまとめてくださいました。私は、あの赤潮発生以来、こうした専門書が世に出ることを心から願っていました。お二人に敬意を表し、この書物によって、びわ湖が再び世界に発信されることを期待します。 (第43～45代知事 武村正義)

地球は海と山と平野で構成されている。滋賀県は、周囲を一千m級の山脈で囲まれた盆地で、その真ん中に世界屈指の古代湖「琵琶湖」がある。この盆地は「湖国」と呼ばれ、一本の河川で太平洋に繋がり、わが国の歴史や文化、産業の発展とともに、交通・産業・都市・学術の集積を促し、活力ある地域となってきた。しかし1977年、それが琵琶湖に赤潮の発生を呼ぶこととなった。これを機に湖国では「人と自然のあるべき姿」の模索が始まった。本書は、その拠点を担う琵琶湖環境科学研究センター10年の成果である。今こそ人類は世界の英知を集め、「持続可能社会のモデルづくり」を急がねばなるまい。 (第49～50代知事 國松善次)

図書出版 昭和堂